発行／青森県立自然ふれあいセンター　〒038-1301 青森県青森市浪岡大字大釈迦字沢内沢 1-1
TEL 0172-62-4527　FAX 0172-62-8510　URL http://www.bonjyu-furesen.info/　メールアドレス bonjyu@jomon.ne.jp

□ 行事レポート □

●秋のふれあいデー 10月9日（土）～10日（日）

ガイド案内付きの登山、クラフト教室、センター職員によるトークショー、木登り体験を実施しました。

●紅葉トレッキング　10月24日（日）

梵珠山～馬ノ神山～魔ノ岳～空沼をトレッキング。津軽山地の南側を縦走し、紅葉を満喫しました。

●自然まるごと発表会・特別講演会 11月7日（日）

４人による発表会と、青森県警察山岳救助高度技能指導官佐藤高正氏による「山岳遭難と救助」の講演を行いました。

●ブナ岱コーストレッキング 11月14日（日）

木の葉が落ち、見通しが良くなったブナ岱を散策。晩秋の梵珠山を楽しみました。

●クラフト教室 12月5日（日）

フラワーデザインFLOWERSの大溝千秋 氏を講師に迎え、クリスマスリースの制作を行いました。

●野鳥観察会 尾駮沼～鷹架沼～小川原湖 12月12日（日）

六ケ所村周辺の沼でガン･カモ類を中心に観察しました。オジロワシも見ることができ､充実した観察会となりました。

●キバナイカリソウ

齋藤 信夫（青森自然誌研究会）

この植物も面白い名前をつけられたものである。植物の名前はその植物の特徴をとらえてつけられているが、この植物の場合は、黄色の花を咲かせるイカリソウという見方だろう。それではイカリソウとはどんな植物なのかとなるが、その点については、花の形を船が停泊する際に降ろす錨に見立てたからだという。金属製の強靱で堅い本物の錨に対し、植物のイカリソウの仲間は華奢に見えるが神々しく初夏の風に揺れる。

梵珠山でのキバナイカリソウは山頂へ向かう登山道の、やや湿り気のある道端の斜面に点々と生育していて、5月上旬～下旬にかけて長さ3cm ほどの多くの花をぶら下げる。花を錨に見立てたとはいうものの、本物の錨がぶら下がるときの姿とは上下が逆のように私には見えてしまう。花は黄花というよりも、さらに白っぽい印象を受ける。小さな葉はハート形を長く伸ばしたような形で、葉先は鋭く、葉の縁に棘のような毛がある。青森県内では八戸周辺に淡紫色の花を咲かせる本来のイカリソウが生育しているといわれるが、青森市や弘前市のような津軽地方では私はイカリソウの生育を確認できずにいる。どこかにひっそりと隠れているのかも知れない。

ところで、これまでも春から秋にかけたキバナイカリソウの生態的な変化を気にかけてきたが、結局、果実が熟す時期やその様子をはっきり捉えることができないまま今に至っている。私自身は植物の栽培が苦手なので確認はいつもフィールドだ。そしてまた、同じ個体を追うような観察上の常とう手段を講じていないという不手際もあるのでなおさらである。これまでは、せいぜい6月下旬が果実確認の限界だった。また、花が終わってすぐでさえ果実らしいものができている個体に出会う機会は結構少なかった。そんな調子で見続けてきたためか、キバナイカリソウは果実ができづらい野草なのかなと思うようになってしまった。受粉のタイミングや花粉の伝搬を媒介する昆虫の問題、花粉や胚珠の繁殖能力の問題などかなと自分勝手にとらえたりしている。とにかく、花期には相当数の花を確認できても、果実の頃にはそれらしきものの確認数が少なくなり、いつの間にか視界から消えている。

他の地方での研究によると、イカリソウの仲間は異なった種同士が交雑して新しい個体が生まれるという現象、つまり「生物の進化」の側面からは非常に興味深い植物だといわれている。梵珠山の場合、異なった種同士が云々ということはほとんど考えられないだろうけれど、季節や年月を追いながらキバナイカリソウを観察していけば、これまでは知られていないこの植物の個性に気が付く日がやってくるかもしれない。

キバナイカリソウの花（２０１８年５月７日）

春先、葉や花を広げる前の針金細工のようなキバナイカリソウ（2020年4月6日）

生物こよみ（昨年）　1月　☘☂☃：昨年の天気　℃：昨年の気温（月最高気温）　低：昨年の気温（月最低気温）

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
曜	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
観察できたもの	休館日				ノウサギ・アオゲラ	アカゲラ・ヤマガラ	ツグミ・ヒヨドリ	カケス	アオゲラ・アカゲラ	ホンドテン・アカゲラ	アトリ・カケス	キツネ足跡・ミソサザイ	リス足跡	ブナ、ナナカマド冬芽	アトリ	ヤマガラ・ツグミ	ニホンカモシカ	セッケイカワゲラ	アオゲラ	マヒワ群れ	ツグミ	アオゲラ・アカゲラ	ニホンザル	テン足跡	コゲラ	アトリ群れ	テン、ノウサギ足跡	アオゲラ	ツグミ・コゲラ	コゲラ・ヤマガラ	カケス
天					☃	☃	☃	☃	☘	☃	☃	☀	☃	☃	☀	☘	☃	☃	☃	☃	☘	☘	☀	☀	☀	☘	☂	☘	☃	☃	☃
℃	-7	-6	-3	-4	-4	-2	-1	-6	-4	-5	-2	2	2	1	1	4	0	-1	-3	-4	4	3	2	4	5	6	5	0	1	-4	-4
低	-8	-9	-9	-5	-8	-9	-7	-9	-10	-8	-8	-7	-2	-4	-5	-2	-5	-6	-9	-7	-4	-1	-5	-7	-6	-4	-2	-3	-5	-5	-6

●レースをまとうグンバイムシ

市田 忠夫（津軽昆虫同会）

グンバイムシはカメムシの仲間ですが、ほとんどの種が1cm程度の小形種です。種によって、草本、樹木、コケ（蘚類）から吸汁して暮らしています。

グンバイムシという名前は、成虫の形体によるもので、成虫でも1ｃｍ前後の小さな仲間です。大部分の種類は相撲の行司がもつ「軍配」のような形をしています。蘚類を利用する種は、体が円形に近く、マルグンバイと呼ばれ、倒木などのコケが生えた部分を手でなでると、驚いて苔の隙間から出てきます。

維管束植物を利用するものは、利用する植物も多岐にわたり、形態的にも多様ですが、マルグンバイとは異なり、グンバイムシという名前がふさわしいものとなります。

本県の八甲田山系のハクサンシャクナゲの葉裏には、固有種のハッコウダグンバイが寄生します。下北半島のシャクナゲにいるグンバイムシも良くにていますが、これはまだ学名･和名が確定されていないかもしれません。

ハッコウダグンバイのように、生息地が限定される種がある一方では、海外から侵入した種もあります。プラタナスグンバイやアワダチソウグンバイなどが、そうした侵入種です。プラタナスグンバイは青森県では、年に五戸町で見つかりましたが、アワダチソウグンバイは、秋田県までは侵入しているとのことですが、本県では未確認です。

グンバイムシには、虫こぶを作ってその中で生育するものもいます。ニガクサに寄生するヒゲブトグンバイで、他のグンバイムシと比べると、触角が太いので、簡単に区別できます。

ハッコウダグンバイ

プラタナスグンバイ

ヒゲブトグンバイ

生物こよみ（昨年）　2月　☀☁☂☃：昨年の天気　℃：昨年の気温（月最高気温）　低：昨年の気温（月最低気温）

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
曜	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
観察できたもの	カケス・コガラ	アオゲラ	ヒヨドリ・アオゲラ	マヒワ群れ	アオゲラ	ホンドテン・ベニヒワ	アトリ群れ	ホンドテン	マヒワ群れ	カケス	アトリ・トビ・ミソサザイ	ホンドテン	ヒレンジャク・キレンジャク	ヤマドリ	ノウサギ足跡	テン、リス、キツネ足跡	ウソ	マヒワ群れ	アオゲラ・ヤマドリ	カワガラス	ヒガラ・キレンジャク	アオゲラ	マヒワ・コガラ・ヒガラ	マヒワ・ツグミ	アカゲラ・アオゲラ	アトリ・ツグミ	セッケイカワゲラ	カモシカ足跡・ヤマドリ
天	☀	☃	☃	☃	☃	☁	☃	☃	☃	☃	☃	☀	☀	☀	☁	☃	☃	☁	☁	☂	☁	☂	☁	☃	☃	☁	☀	☁
℃	5	5	-6	-5	1	5	1	-6	-3	1	0	6	9	11	6	6	-2	0	3	6	3	3	1	-5	1	-1	2	7
低	-9	-7	-8	-9	-8	-2	-6	-7	-7	-4	-3	-8	-6	-2	1	-5	-6	-6-	-2	1	-3	-3	-5	-7	-7	-6	-12	-7

「ヤケドキン」と呼ばれるきのこ

湯口 竹幸（青森県きのこ会）

囲炉裏や薪ストーブで暖をとり、鍋をかけていた時代にはヤケドが頻度の高い外科治療対象の一つで、切り傷と共に火傷を経験したことがない人はいないであろう。

当地では「ノドヤケ」または「ヤケドキン」といえば「ムキタケ」のことで、秋にブナ・ミズナラなど種々の広葉樹枯幹に重なり合って多数発生し、広く食用とされる。味は上品で肉厚、傘表皮下にあるゼラチン層がとろみとなり、のど越しが良いのでついツルリと飲み込んでしまうと「ノドヤケ」を味わうことになる。

今年10月、本家の「ヤケドキン」が県内で初めて確認された。奥入瀬のササヤブと道路の間に発生していたと新聞紙上に掲載されたこのきのこは「ドクササコ」（毒笹子）の名が示すように、主にササヤブに発生し、広葉樹や雑木林、まれにカラマツ林にも発生する。ヤケドキンの他に「ササコ」「ヤブシメジ」「ヤケドタケ」そして「ジゴクモタシ」と呼ぶ地方もあり、その苦痛が想像できる。食後２～４日後、四肢末端（加えて、鼻・耳・性器にも）の発赤、腫脹、疼痛、しびれ感が出現。疼痛は６日頃までにピークに達し、15日頃より軽減、30～50日で消失することが多い。七転八倒する痛みは焼け火箸で刺され続けるようだと表現され、現在のところその症状を和らげる鎮痛剤はなく治療薬もまだない。その苦痛を癒すために冷水に指を浸し続けると皮膚がふやけてはがれ、そこから細菌感染すると、歩行･排尿も困難となる。そばを通った人の風でも痛む。そんな激痛が続き不眠となり、衰弱死や自ら命を絶った例もあるらしい。毒きのこと言えば食後間もなく、または数時間してから嘔吐･下痢など消化器症状が来る。神経毒きのこでも発汗・めまい・興奮・幻覚などの症状は日をまたがず発症するため、大抵のきのこ食中毒ではきのこが原因と思い当たるのだが、発症までの時間が長いため、このきのこが原因と判らずに秋の風土病とされていた時代があった。

青森県以南の特に山形から京都の日本海側での発生が知られていたが、とうとう本県にもやってきた。かねてより温暖化で「きのこ」も北上が懸念されていたが、梵珠山でも一昨年南方系のアシナガイグチがアカゲラの道で確認されている。ドクササコの毒成分は「アクロメリン酸」･「クリチジン」等とされ、毒成分は水溶性で煮たきのこそのものよりも汁のほうに多くなる。

ドクササコは梵珠山で発見されたものではないが、この恐ろしいのに見た目が地味で毒っぽさを感じさせないきのこが発見される日が来るかもしれない。ニホンジカの被害も県南の果樹農園で目立ち始め、イノシシも県境を越えて侵入している、困ったものも北上して来つつある。

ドクササコ

梵珠山のムキタケ

生物こよみ（昨年）　３月　☀☁☂☃：昨年の天気　℃：昨年の気温（月最高気温）　低：昨年の気温（月最低気温）

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
曜	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水
観察できたもの	マヒワ・ヤマガラ	ホンドリス	ヒヨドリ	ヤマガラ・カワガラス	エナガ・カガラ	コゲラ・アオゲラ	ヤマドリ	ヒヨドリ・アオゲラ	カモシカ・テン足跡	ゴジュウカラ・ヤマガラ	マヒワ・アカゲラ	ウソ・エナガ	エナガ・ゴジュウカラ	ヒヨドリ・ミソサザイ	マルバマンサク花	ホオジロ	ヤマドリ・ホオジロ	カワラヒワ・エナガ	ミズバショウ花	ホンドリス	カワガラス・ウソ	カシラダカ	ヤマガラ・シジュウカラ	ノスリ	キセキレイ	カワガラス・カワラヒワ	ヒオドシチョウ	フクジュソウ花	セセリチョウ	ニホンザル群れ	カシラダカ
天	☁	☂	☃	☀	☀	☃	☀	☁	☀	☀	☀	☂	☂	☂	☀	☁	☂	☁	☀	☀	☂	☁	☁	☀	☁	☁	☀	☁	☀	☀	☀
℃	7	6	1	8	13	5	3	3	8	4	8	7	7	5	10	9	3	4	6	7	7	6	9	13	8	9	12	11	17	15	14
低	-2	-1	-6	-7	1	-4	-5	-6	-4	-3	0	-1	-1	2	0	0	0	1	0	-2	2	2	1	2	2	2	1	2	4	2	1